



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

すべての人の救いのために来られた

主の降誕、おめでとうございます。「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。」（2・10）夫婦にとって、一人の人の誕生は大きな喜びです。しかしながら主の天使は、この一人の人の誕生を、「民全体に与えられる大きな喜び」と表現しました。

今日のミサの始まりは、照明を落とした暗い中で始まりました。人は暗闇に置かれると、光を探し求めるものです。探し求める光が、今日この世界に与えられたのです。ヨセフとマリアにとっての光、羊飼い、これから訪ねてくる占星術の学者たち、もっと言うと、暗闇に置かれている民全体、すべての人にとっての光が、今日与えられたのです。

今日のミサの中で、私たち皆が暗闇の中に置かれました。「私は暗闇の中に住んではいない。私は十分光の中に暮らしている。」そう考える人もいるかも知れませんが。しかしながら私たちの毎日の生活は、希望を失いそうになる出来事がたくさんあります。

私自身には生じていなくても、家族や親戚、親しい友人が、悲しい思いをして落ち込んでいたりしないでしょうか。あなたはそれを知って、共に悲しんであげるのではないのでしょうか。

慰めの言葉も浮かばないような悲しい出来事を体験した時、「しかたがないよ」「あきらめようよ」ではなくて、「どんな悲しみの中でも希望を与えてくれる方がいるよ」と声をかける人でありたい。その希望の光として、イエスはこの世に生まれてきてくださったのです。

イエスは、一組の夫婦の希望として生まれてきたものではありません。周囲の人々という限られた範囲の希望として生まれたのでもありません。今何かの形で闇の中に置かれている人、何らかの影を背負って生きている人、そうしたすべての人を照らす光として、お生まれになったのです。

考えてみると、何も暗闇を抱えていない人など一人もいません。理解してもらえないことを抱えていたり、取り返しのつかない過去を抱えていたり、心や体の不調に苦しんでいたり、何かしら塞ぎ込みそうになるものを抱えて生きているわけです。イエスはその一つ一つに耳を傾け、癒やしと慰めを与えてくださいます。

イエスが今置かれている姿が、すでに光を与えようとしています。お産の環境がない中で生まれたこと、イエスの誕生に不安を抱いたヘロデに命を狙われていること。どんなに過酷な未来にも、イエスはお自分の命をかけて、私たちのために手を差し伸べてくださるのです。

この夜半のミサを終えたなら、どうか馬小屋の近くに来て、しばらく祈って帰ってください。そして「私の抱えている闇に、あなたは答えてくださいますか？」と問いかけてみてください。救い主は今、すぐに答えてくださいます。